

大正大学綜合佛教研究所年報

平成十四年三月第二十四号 抜刷

〔個人研究〕

# Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 (1.2.5-1.3.1)

古 宇 田 亮 修



〔個人研究〕

# Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 (1.2.5-1.3.1)

古宇田 亮 修

## はしがき

仏教興起以前から仏教興起前後にかけてのインドの宗教思想ならびに言語文化を研究するに際して、ヴェーダ (Veda-) と呼ばれる一大祭祀文献を措くことは許されない。なかでも筆者が数年来研究テーマとしている白 (Śukla-) Yajur-Veda に属する “Śatapatha-Brāhmaṇa ” (以下 ŚB.) Mādhyandina 伝本は、仏教興起からさほど遠くない時期の北インドもしくは東北インドにおいて成立した祭祀文献であり、当時の伝統的宗教の状況を伺うことのできる貴重な資料である<sup>1)</sup>

本稿は、以前に発表した拙稿<sup>2)</sup>に引き続き、ŚB. の Mādhyandina 伝本、Kāṇḍa 1. Adhyāya 2. Brāhmaṇa 5 から Kāṇḍa 1. Adhyāya 3. Brāhmaṇa 1 までの翻訳と筆者による註を提示し、テキストの理解に裨益することを意図したものである。尚、前回の拙稿を提出後、Kāṇva 派の対応箇所テキストと英訳 (Sw.) も発表され、今回の原稿作成に際してはこちらも参照した。

## 翻 訳

1.2.5.1<sup>3)</sup> 実に神々と阿修羅たちというプラジャーパティに由来する両者は争っていた。そのとき神々はほぼ敗勢になった<sup>4)</sup>。さて、そのとき阿修羅たちは考えた—「事実上、この世界はまさしく俺たちのものになった」と。

1.2.5.2 そして彼らは言った—「さあ、この大地を分配しよう。それを分配して、俺たちは [そこで] 生活しよう」と。彼らは西から東に向かって雄牛

の皮<sup>5)</sup> [の巻尺] によって分配しながら進んだ。

1.2.5.3 実に神々はその [会話] を聞いた。「さて実に阿修羅たちはこの大地を分配している。出発だ!<sup>6)</sup>阿修羅たちがこの [大地] を分配している場所へ私たちは行こう! 自分に何も分配できないとき、誰がそこに行くだろうか?」と [言い合って]、彼らはまさしく祈献であるヴィシュヌを先頭にして [阿修羅の所へ] 赴いた。

1.2.5.4 そして彼らは言った—「私たちにもこの大地を分け与えて下さい! 私たちにもこの [大地] における分け前があつて当然でしょう!」と。するとその阿修羅たちはしぶしぶ<sup>7)</sup>言った—「ここにいるヴィシュヌが横たわつた範囲だけ [の土地] をお前たちに与えよう」と。

1.2.5.5 そのときヴィシュヌは小男 (vāmana-) であった。これに関し、神々は怒らなかつた—「祈献に等しいものを我々にくれるとは、彼らは実に大きなものを私たちにくれたものだ」と [考えて]。

1.2.5.6 彼らはヴィシュヌを東方に横たわらせ、韻律によってあらゆる角度から取り囲んだ—『ガーヤトリー韻律によって汝を取り囲まん』(VS.1.27a) と南方から [唱え]、『トリシュトウブ韻律によって汝を取り囲まん』(b) と西方から [唱え]、『ジャガティー韻律によって汝を取り囲まん』(c) と北方から [唱えて]。

1.2.5.7 彼らは彼を韻律によってあらゆる角度から取り囲んで、正面 (東方) に火を燃え上がらせて、彼 (Viṣṇu- = 祈献) とともに讃唱し、尽力し続けた。彼らは彼 (Viṣṇu-) によってこの大地全体を獲得した。彼らは彼によってこの [大地] を獲得した (sam√vid-) ので、ヴェーディ (vedi-) と称するのである。それゆえ [人々は] 言うのである—「ヴェーディの大きさが大地の大きさである」<sup>8)</sup>と。なぜならば、彼らはその [ヴェーディ] によってこの [大地] 全体を獲得したから。さて、このように知るものは、以上の通りに実に敵たちが所有するこの [大地] 全体を奪い取り、敵たちをこの [大地] から閉め出すのである。

1.2.5.8 このヴィシュヌは疲弊し、あらゆる角度から韻律によって取り囲まれ、正面に火があつて逃げ道はなくなったので、まさにその [ヴェーディ]

において草本の根に隠れた<sup>9)</sup>。

1.2.5.9 するとその神々は言った—「ヴィシュヌは、今、どこにいったのか？ 祈献は、今、どこにいったのか？」と。そして彼らは言った—「[彼は] あらゆる角度から韻律によって取り囲まれ、正面に火があって逃げ道はない。まさにこの[ヴェーディ]において探せ！」と。彼らは掘り出すようにして彼を探した<sup>10)</sup>。彼らは3アングラ[の深さ]のところで彼を見つけた。それゆえ、ヴェーディは3アングラ[の深さ]にすべきなのである。さて、これに関してまたパーンチもソーマ祭のヴェーディを3アングラ[の深さ]に作ったのである。

1.2.5.10 しかし、これに関して[ひとは] そのようになしてはならない(=ヴェーディを掘ることは許されない)。実に彼は草の根に隠れた。それゆえ[ひとはヴェーディの中では]まさに草の根を引き抜くように言うべきなのである<sup>11)</sup>。この場所で現にヴィシュヌを見つけた(anu√vid-)ので、ヴェーディ(vedi-)と称するのである。

1.2.5.11 彼らは彼を見つけて後半の囲い込みによって取り囲んだ。『また汝は良き土地なり。また汝は吉祥あるものなり』(VS.1.27d)と彼らは南方から[唱え]、このように大地を獲得して、良き土地にし、吉祥あるものにした。『また汝はやわらかいものなり。また汝は座り易いものなり』(e)と彼らは西方から[唱え]、このように大地を獲得して、やわらかくし、座り易くした。『また汝は滋養に満ちたものなり。また汝は液汁に満ちたものなり』(f)と彼らは北方から[唱え]、このように大地を獲得して、精気あふれる住むに適した[土地]にした。

1.2.5.12 実に彼は3回前半の囲い込みを行い、3回後半の[囲い込みを行う]。ゆえに6回[囲い込みを行う]。実に6とは1年の季節[の数]である。年とは祈献にしてプラジャーパティである<sup>12)</sup>。[ゆえに]祈献の大きさに、その範囲まで、彼はこのように取り囲むのである。

1.2.5.13 6つの発言によって彼は前半の囲い込みを行い、彼は6つ[の発言]によって後半の[囲い込みを行う]。ゆえに12の発言がある。実に12とは1年の月[の数]である。年とは祈献にしてプラジャーパティである。

[ゆえに] 祈献の大きさに、その範囲まで、彼はこのように取り囲むのである。

1.2.5.14 「[ヴェーディ] 西方に向けて1ヴィヤーマの長さにするべし」と言うものもいる。実に人[の身長]はその位である。なぜならば、[ヴェーディは]人に等しいから。[ヴェーディは]東方に向けて3アラトニの長さである。なぜならば、祈献は3つ一組であるから。[しかしながら]これに関して[正確な]単位は存在しない。自分の心の中で考えた長さによればよいのである。

1.2.5.15 彼は火の両側に[ヴェーディの]両肩を設置する。実にヴェーディは女子であり、火は丈夫である。実に女子は丈夫を魅了して[一緒に]寝る。子をつくる性交はこのように行われる。それゆえ、彼は火(献供火)の両側に[ヴェーディの]両肩を設置するのである。

1.2.5.16 実にその[ヴェーディ]は西方に向けて広がり、真中で収縮し、再び東方に向けて広がるべきである。なぜならば、人々はこのように女子を賞賛するから—「広い腰をもち、両肩の間は[腰より]狭く<sup>13)</sup>、胸の部分は抱きやすい(=細い)」と[言って]。彼はこのように神々のためにそれ(ヴェーディ)を好ましい[形]にする。

1.2.5.17 実にそれは東方に向けて傾斜になるべきである。なぜならば、東方は神々の方角であるから。また北方に向けて傾斜に[なるべきである]。なぜならば、北方は人々の方角であるから。彼は南方に向けて泥土(puṛiṣá-)を盛り上げる。実にこれは祖霊の方角である。それ(ヴェーディ)が南方に向けて傾斜になるならば、祈献主はすぐにあちらの世界へ行くにちがいない。しかしながら、このようにすれば(=南方を泥土で盛り上げれば)、祈献主は長く生きるのである。それゆえ、彼は南方に向けて泥土を盛り上げるのである。彼は[南方を]泥土に満ちたものにするべきである。実に廐肥(puṛiṣá-)は家畜である<sup>14)</sup>。このように彼はそれ(南方=祖霊の方角)を家畜に富むものにする。

1.2.5.18 [アグニードは]<sup>15)</sup>それ(ヴェーディ)を滑らかにする。さて、かつて実に神々は今まさに戦闘のために[軍隊を]召集しているとき、言った

ものであった—「さあ、この大地の不滅の祈献場 (devayajāna-) を月に移動しよう！ もしも阿修羅たちがここ (大地) からわれらを撃退したら、その後われらは [月において] 讃唱し尽力しつつ、再び [彼らを] 打ち倒そう！」と。彼らはこの大地の不滅の祈献場であった場所を月に移動した。ゆえに月にはこのように黒い [場所] があるのである<sup>16)</sup>。それゆえ彼らは言う—「月にはこの大地の祈献場がある」と。そして実にこの [大地] の祈献場において祈献が行われるのである。それゆえ、実に [ヴェーディを] 滑らかにするのである。

1.2.5.19 彼 (アグニード) は [ヴェーディを] 滑らかにする—『血生臭いもの (krūrā- = 魔物 Arāru-) が逃げ去る前に、強力なもの (virapsín-)<sup>17)</sup> よ！』 (VS.1.28a) と [唱えて]。実に血生臭いものは戦闘である。なぜならば、戦闘において血が流され、殺された人や馬が横たわるから。戦闘の前に彼らはこの [祈献場] を [月に] 移動したがゆえに、彼は唱える—『血生臭いものが逃げ去る前に、強力なものよ！』と。『生命を与える大地を持ち上げて』 (a) と [彼は続ける]。なぜならば、彼らはこの大地にとっての生命であったもの (祈献場) を持ち上げて、それを月に移動したから。それゆえに彼は唱える—『生命を与える大地を持ち上げて』と。『月まで彼らがスヴァダー (祖霊食?)<sup>18)</sup> によって高めたところの [大地を]』 (a) とは、「月まで彼らがブラフマンによって運んだところの [大地を]」<sup>19)</sup> ということを唱えているのである。『また賢者らはそれ (月に移動された祈献場) に向けて祈献す』 (a) というこの [祈献文] によって、彼はそれ (月に移動された祈献場) に向けて祈献する。さて、このことを以上のように知っている人にとって、実にこの祈献場で祈献が行われるのである。

1.2.5.20 次に唱える—『散布水を置くべし！』 (VS.1.28b) と。実に雷という木剣とバラモンは以前この祈献を防御した。水は雷である。ゆえに彼はこのように雷を防御として置く。[ゆえに] 実に彼は散布水を [木剣の] 真上に保持しながら、次に木剣を取り上げる。さて、彼が木剣を置いたまま散布水を置くならば、2つの雷は衝突するであろう。さて、そうすれば2つの雷は衝突しない。それゆえ、彼は散布水を [木剣の] 真上に保持しながら、次

に木剣を取り上げるのである。

1.2.5.21 次にこの音声を発する－「散布水を置くべし。敷草を置くべし！ 汝は柄杓を繁栄させよ！ [祈献主] 夫人を縛るべし！ アー ज्याをもって やって来るべし！」と。これは [アドヴァリユに対する] 指令にほかならない。彼（アドヴァリユ）が望むならば、[その指令を] 述べるべきである。しかしながら彼が望むならば、省略してもよいであろう<sup>20)</sup>。なぜならば、[アグニードは] ここにおいてこの行作を行うべきであることを知っているからである。

1.2.5.22 次に北方に向けて木剣を投げつける。もしも彼が呪詛を願うならば、『何某に汝を雷として投げつけん！』と彼は唱える。実に木剣は雷である。さて、それによってこそ彼は [怨敵を] 打ち倒すのである<sup>21)</sup>。

1.2.5.23 次に両手を洗う。なぜならば、この [ヴェーディ] に [木剣による] 傷口が生じたときに、[手によって] この [ヴェーディ] からこの [木剣による傷口] を除去したから<sup>22)</sup>。それゆえ彼は両手を洗うのである。

1.2.5.24 さて、最初に祈献したものたちは [焼供およびヴェーディに] 触って祈献していたものである。彼らは罪深いものとなった。このとき祈献しないものたちは徳の高いものとなった。それゆえ、不信仰が人間たちに取り憑いた。「祈献するものたちは罪深いものとなるのに対し、祈献しないものたちは徳の高いものとなる」と [人々は考えた]。ゆえに、この [世界] からの焼供が神々に到達することはなかった。実に神々はこの [世界] からの献供 (pradānā-) によって生活しているので、(後続)

1.2.5.25 そのときその神々はブリハस्पティ・アーングラサに言った－「実に不信仰が人間たちに取り憑いた。彼らに対し祈献を規定せよ！」と。そしてそのブリハस्पティ・アーングラサは [人間たちの所に] やって来て言った<sup>23)</sup>－「どうして汝らは祈献しないのだ！」と。すると彼らは言った－「何をすき好んで祈献しなければいけないのか？ 祈献するものたちは罪深いものとなり、祈献しないものたちは徳の高いものとなる [というのに]」と。

1.2.5.26 するとそのブリハस्पティ・アーングラサは言った－「実に神々



のために創出されたもの<sup>24)</sup>、すなわち調理された焼供と整えられたヴェーディが祈献物 (yajñā-) となる、と我らは聞いている<sup>25)</sup>。彼はそれに触って [祈献を] 執行した。それゆえ、彼は罪深いものとなった。彼はそれに触ることなく祈献すべきである。そうすれば、彼は徳の高いものとなるであろう」と。「いつまで [触ってはいけないのか]？」と [人間たちはたずねた]。「敷草が撒かれるまでである」と [プリハスパティは答えた]。さて実に、じじつ敷草によってこの [ヴェーディ] は鎮められる<sup>26)</sup>のである。もしも敷草が撒かれる前に、何かが落ちたならば、まさに敷草を撒くものがそれを [ヴェーディの外に] 投棄すべきである—敷草を撒くときに [それを] 足で踏みつけるかもしれないから<sup>27)</sup>。以上のように知って [焼供およびヴェーディに] 触ることなく祈献するものは、まさしく徳の高いものとなる。それゆえ、決して触ることなく祈献すべきである。(SB. 1.2 了)

1.3.1.1 実に彼 (アグニード) は柄杓を [手箒で] 掃き清める。柄杓を掃き清めるのは、実にあたかも神々の行動に人間の [行動は] 追従するからである。それゆえ、人間に対する給仕の準備ができたときに、(後続)

1.3.1.2 容器を洗浄するのである。それら [の柄杓] によって洗浄してから給仕を行う。実にこのように神々にとって調理された焼供や整えられたヴェーディが祈献物となる。彼らにとって、柄杓なるものがこの容器にほかならない。

1.3.1.3 [それゆえ柄杓を] 掃き清めるときは [事実上] それらを洗浄することにほかならない—「洗浄したものとともわれは進まんことを」と [願って]。実に神々に対してはまさに2つのものによって洗浄し、人間に対しては1つのものによって [洗浄する]。神々に対しては水およびブラフマンによって。なぜなら水はクシャ草であり、ブラフマンは祈献文であるから。人間に対しては1つのもの、すなわち水によって。以上のように [神々の柄杓の清めと人間の柄杓の清めは] 別々の方法で行われる。

1.3.1.4 次に、スルヴァ杓を手にとる。[そして] それを熱する—『羅刹は焦げり。アラティらは焦げり』(VS.1.29a) もしくは『羅刹は燃え尽けり。

アラーティらは燃え尽けり』(b) と [唱えて]。

1.3.1.5 さて、実に神々が祈献を展開しつつあるとき、彼らは阿修羅・羅刹たちによる襲撃を恐れた<sup>28)</sup>。ゆえに、このようにまさに祈献の冒頭において魔物たちや羅刹たちをこの場所から撃退する。

1.3.1.6 彼は実にこうやって (iti)<sup>29)</sup> [手箒の] 先端によって [柄杓の] 内側を掃き清める—『汝は研ぎ澄まされていなく [とも] 敵を滅する者なり』(VS.1.29c) と唱えて。あたかも倦むことのない者が祈献主の敵を滅するように、そのようにこれを唱える—『ヴァージヤ (活力/回復力) に [心を] 集中させるために<sup>30)</sup>、ヴァージヤを保持する (vājīn-) 汝を掃き清めん!』(c) と。「祈献にふさわしい汝を祈献のために掃き清めん!」ということ唱えているのである。この [祈献文] とともに全ての柄杓 (srúc-) を掃き清める。[ただし] スルチュ杓 (Srúc- f.) を [掃き清める場合は] 『ヴァージヤを保持する (vājīni- f.) 汝を ...』と [唱え]、プラシトラハラナを [掃き清める場合は] 黙って [行う]。

1.3.1.7 彼は実にこうやって [手箒の] 先端によって [柄杓の] 内側を掃き清め、こうやって [手箒の] 根本によって外側を掃き清める。実にこのプラナはこの行作のように (itīva) [前を向き]、ウダーナはこの行作のように [後ろを向く]。このように彼はまさにプラナとウダーナを置く<sup>31)</sup>。それゆえ、この行作のように [前を向く] 毛と、この行作のように [後ろを向く] 毛があるのである。

1.3.1.8 実に彼は [柄杓を] 一つずつ掃き清めて熱する度に [アドヴァリユに] 手渡す。[手で] 触って洗浄してから、最後には [手で] 触ることなく洗い流すように彼は行う。それゆえ、彼は熱する度に手渡すのである。

1.3.1.9 実に彼はまさにスルヴァ杓を最初に掃き清め、次にその他の柄杓たちを [掃き清める]。実に柄杓 (f.) は女であり、スルヴァ杓 (m.) は丈夫<sup>ますらお</sup>である。それゆえ、もしも多くの女たちが集合しているときにその中に一人の少年のような男がいたならば、彼がまず赴くところに他の女たちはついてゆくのである。それゆえ、まさにスルヴァを最初に掃き清め、次にその他の柄杓を [掃き清める] のである。

1.3.1.10 実に彼は火に対して [埃を] 注ぎかけることのないように掃き清めるべきである。食物を運んでゆくもの (火) に対して容器洗淨水を注ぎかけるように行うのである。またそれゆえに火に対して [埃を] 注ぎかけることのないように掃き清めるべきである。ちょうど東方に向かって歩み昇ってから、(後続)

1.3.1.11 そのとき、一人の [祭官] が柄杓掃き (手箒) を火 (献供火) の中に投入する。確かに柄杓は手箒の支配下にあり、それらによって掃き清められた。実にあるものが祈献の支配下にあるならば「それは祈献から外れることのないように」と [考えるのが当然である]。しかし、そのようにしてはならない。食物を運んでゆくもの (火) に対し、容器洗淨水を飲ませるように行うべきである。またそれゆえに、これらの [埃] を [ごみ捨て場に] まさに捨て去るべきである。

1.3.1.12 次に [アグニードは、祈献主] 夫人を縛る。実に夫人なるものは祈献の後ろ半分 / 背面 (jaghanārdhá-) である。「展開されつつある祈献が私の面前に進むことを！」と [彼は願う]。彼女をまさに縛る - 「縛られたものが私の祈献の側に坐ることを！」と [願って]。

1.3.1.13 [アグニードは] 縄によって縛る。なぜならば [ひとは] 牽引動物を縄によって縛るから<sup>32)</sup>。実に夫人の臍から下は祭礼に不適なものである。そのとき彼女は以下のようにアージャをまさに見つめようとする。彼女のまさにその [祭礼に不適な部分] を彼はこのように縄によって包むのである。それから、彼女は祭礼に適した上半身によってアージャを見つめる。それゆえ [アグニードは] 夫人を縛るのである。

1.3.1.14 実に彼は [夫人を] 衣服の上から縛る。実に衣服は草本であり、索縄はヴァルナの持ち物である。ゆえに彼はまさに草本をこのように包む。また、そうすればこのヴァルナの索縄が彼女を傷つけることはない。それゆえ、彼は衣服の上から縛るのである。

1.3.1.15 彼は縛る - 『汝はアディティのための帯なり』(VS.1.30a) と唱えて。実にアディティとはこの大地であり、それは神々の夫人である。実に彼女はこの [祈献主の] 夫人である。ゆえにこのように彼は [縄を] 彼女のた

めの索縄ではなくまさに帯とするのである。実に帯 (rāsnā-) は腰帯 (hīra-) である。彼はこのように [縄を] まさに彼女の帯となすのである。

1.3.1.16 実に彼は結び目を作ってはならない。実に結び目はヴァルナに属する。もしも彼が結び目を作るならば、そのときヴァルナが夫人を捕らえることとなる。それゆえ、彼は結び目を作ることがないのである。

1.3.1.17 まさに上方に向けて [彼はその縄を] 巻きつける - 『汝はヴィシュヌの光線 (veśya-) <sup>33)</sup>なり』 (VS.1.30b) と唱えて。実に彼女は西方において東方を向いて神々に対する祈献物の側に坐ってはならない。実にアディティとはこの大地であり、それは神々の夫人である。彼女 (祈献主夫人) は西方において東方を向いて神々に対する祈献物の側に坐るならば、この [大地=アディティ] に昇るにちがいない。[そうすれば] その夫人はすぐにあちらの世界に到達するにちがいない。しかしながら以下のようにすれば、[祈献主] 夫人は長生きする [であろう]。ゆえにこのようにこの [大地=アディティ] に対し謝罪するのである。そうすれば、この [大地=アディティ] が彼女を傷つけることはない。それゆえに [夫人は家長火の] ちょうど南方に坐るべきである。

1.3.1.18 次に、[夫人は] アージャを見つめる。実に夫人は女性であり、アージャは精子である。まさに子をつくる性交はこのように行われる。それゆえ、アージャを見つめるのである。

1.3.1.19 [ゆえに] 彼女は見つめる - 『無傷なる (ádabdha-) 眼によりて汝を見つめん』 (VS.1.30d) と [唱えて]。『害されていない (ánārta-) 眼によって汝をみつめる』ということ唱えているのである。[続いて唱える] - 『汝はアグニの舌なり』 (d) と。実にこのようにアグニ (火) の中に [アージャを] 焼灌するとき、アグニの舌のようなものがいくつも出現する。それゆえ唱える - 『汝はアグニの舌なり』と。『神々をよく勧請するもの (suhū-) ...』 (d) とは「神々に対し好意的なもの (sādhu-)」ということ唱えているのである。『... となるべし、わがあらゆる祈禱所 (dhāman-) <sup>34)</sup> にとって、あらゆる祈献文 (yajus-) にとって』 (d) とは、「私のあらゆる祈献 (yajñā-) のために ... となるべし」ということを唱えているのである。

1.3.1.20 次に、[アグニードは] アージャを手にとり、東方に向かって走り出す。彼が焼供を調理するのに献供火を用いた場合には、その献供火の上で[アージャを] 熱する－「私の一切の祈献物が献供火の上で調理されんことを！」と【願って】。そのとき、最初にあちら（家長火）で<sup>351</sup>熱するのは、彼は夫人をして今まさに[アージャを] 見つめさせようとするからである。「私は夫人をして[アージャを] 見つめさせよう」と考えてこれより前に西方で[それを] 取り上げるのは実に適切ではないからである。そのとき夫人をして見つめさせないならば、祈献から夫人を排除すべきである。しかしながら【実際には】 そのように祈献から夫人を排除することはない。それゆえに[夫人と] 一緒に[アージャを] 溶かし、夫人に見つめさせてから、東方に設置するのである。しかし彼（祈献主）に夫人がいない場合は、まさに最初に献供火で[アージャを] 熱する。ゆえに彼はそこ（献供火）から[アージャを] 取り上げて、ヴェーディの内部に置くのである。

1.3.1.21 これについて[以下のように] 言う者もいる－「ヴェーディの内部に置いてはならない。実に彼らはここにおいて神々の夫人に対しパトニー・サンヤージャを行う。実に彼は神々の夫人に不倫をさせるのである。すると彼の夫人は夫に満足しないものとなる」と。さてこれに関し、ヤージュニャヴァルキヤはいつも言っていたものである－「教示した通りに夫人に対し[アージャを] 与えなさい。【夫人が主人に満足しないものとならないか】などと誰が悩むであろうか。ヴェーディは祈献であり、アージャは祈献である。私は祈献により祈献を創出しよう！」と。それゆえ彼は[アージャを] まさにヴェーディの内部に置くのである。

1.3.1.22 散布水の中に2つの濾過具がある。そこから[彼は] その2つ[の濾過具] を取り上げ、その2つ[の濾過具] によってアージャを浄化する。実に浄化行為の唯一の神秘的連関はこの[アージャ] をまさに祭礼に適したものにすることである。

1.3.1.23 彼（アドヴァリユ）は[アージャを] 浄化する－【サヴィトリの激励において汝を浄化せん、傷穴のない濾過具によりて、太陽の光線によりて】(VS.1.31a) と【唱えて】。まさにこれこそが神秘的連関である。

1.3.1.24 次にアー ज्याを通した2つの濾過具によって散布水を浄化する—『サヴィトリの激励において汝らを浄化せん、傷穴のない濾過具によりて、太陽の光線において』と〔唱えて〕。まさにこれこそが神秘的連関である。

1.3.1.25 アー ज्याを通した2つの濾過具によって散布水を浄化するのは、水の中に牛乳を入れるためであり、次のように水の中において牛乳は役立つから。雨が降ったときに草本が生え、〔牛が〕草本を食べて水を飲んだ後にこのエッセンス (rása-) <sup>36)</sup>が生じるから。それゆえまたエッセンスは完全性のために〔役立つのである〕。

1.3.1.26 次に〔アドヴァリユは〕アー ज्याを見下ろす。これに関し、ある者(祭式学者)たちは祈献主をして見下ろさせる。これに関し、ヤージュニャヴァルキヤはいつも言っていたものである—「どうして〔祈献主は〕自らアドヴァリユとならないのか? どうして〔祈献主が〕より強力な祈願(āsís-)をなすために自ら〔祈献文を〕唱えないのか? どうして今、彼ら(祈献主)はまさにこの〔アドヴァリユ〕を信賴しているのか?〔答え:〕実に祈献において祭官(ṛtvij-)たちが訴える祈願は、まさに祈献主のものにはかならないからである」と。それゆえ、まさにアドヴァリユが見下ろすのである。

1.3.1.27 彼は見下ろす。実に眼は眞実在である<sup>37)</sup>。なぜならば、実に眼は眞実在であるから。それゆえ、ちょうど今2人の人間が「私は見た!」「私は聞いた!」と口論するに至ったならば、「私は見た!」と言う人を〔我々は〕信じるべきなのである。ゆえに彼はまさに眞実在によってこの〔アー ज्या〕を活性化する(samardhayati) <sup>38)</sup>のである。

1.3.1.28 彼は見下ろす—『汝は光輝(téjas-)なり。汝は輝くもの(śukra-)なり。汝は不死<sup>39)</sup>なり』(VS.1.31)と〔唱えて〕。この眞言はまさに眞実在である。なぜなら、この〔アー ज्या〕は光輝であり、輝くものであり、不死であるから。ゆえに、彼はまさに眞実在によって、この〔アー ज्या〕を活性化するのである。

## 註

1) ŚB. の成立はかつて考えられていた（辻：前650-550（「ヤージュニャヴァルキヤをめぐるて」 p.361）よりも遅い時期に成立したという方向での議論がある。Kāṇva 本の成立を前1世紀の Kāṇva 王朝下にまで下らせる可能性については、Cf. Witzel, *The Vedic canon and its political milieu*, (in *Inside the Texts, Beyond the Texts*, pp.257-345) p.315. もっとも ŚB. の Mādhyandina 本の成立年代については、一筋縄で確定しうるものではないが、少なくとも中核部（第1～5巻）に関しては暫定的にこれを前600-300年の間に置くことにする。仏教興起の年代に関しては、*When did the buddha live?*, ed. by H. Bechert, 1995, Delhi を参照。また、仏教の故地論争の中心である Kapilavastu がどこであるかという議論については、中村瑞隆, 『釈迦の故城を掘る』, 2000, 雄山閣出版, を参照。

2) 「Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 (1.1)」(『大正大学大学院研究論集』, 第21号, 1997, pp.238-217). 「Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 (1.2.1-4)」(『同』, 第22号, 1998, pp.204-189).

3) 1.2.5.1～7の翻訳と研究には、Tripathi, *Der Ursprung und die Entwicklung der Vāmana-Legende in der indischen Literatur*, 1968, p.14, ならびに Kiehnle, “Viṣṇu, vedi, vāmana”, *Studien zur Indologie und Iranistik*, 5/6, 1980, pp.123-136 (関連する黒 Yajurveda-Saṃhitā の説話の翻訳を含む) がある。

4) *anuvyām ivāsuḥ*. Minard I, § 304によれば, *iva* は先行語を弱める働きと、強める働きの2つがあるという。ここでは、この *iva* を先行語／語句の意味を弱める／和らげる不変化辞と解して「ほぼ」と訳した。もしもこの *iva* が存在しなければ、1.2.5.4で阿修羅たちが神々の要求に応じないであろうから、文脈上重要な役割を果たしている。(因みに Minard のいう強める働きに関しては同意し難い点があり、*iva* の機能の全体像に関しては再考の余地があると考えられるが、別稿として論じるべき Syntax 上の大問題であるから本稿ではこれ以上論じない。) Cf. Brereton, “The particle *iva* in vedic prose”, *JAOS*. 102.3, 1982 (この結論にも同意し難い)。 *anuvyām* の

意味は、Caland, Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa, p.231, n. 2 も指摘するように確定し難い。AiG. は \*anu-√vī- 「後ろから追いかける」 から作られた Nomina actionis anu-√vī- “nachstrebend, hintangesetzt” (AiGN. I-II. Nach. p.113; II, 2, p.39; III, p.179-180) の Ac. (=anuviyam) と解する。Bodewitz は、JB. 1. 109の用例を ‘slighted’ (p.63) と訳す。しかしながら通常√as-, √bhū- と一緒に用いられるのは N. であるので、Ac. 形の副詞（「劣った状態で、とるに足らない状態で」）が述語として用いられているとみなした。Cf. PB. 10. 3.2 so ‘nuvyam abhavat. Caland : ‘This one came behind (or ‘dependent on the others’)’. ŚBK. 2.2.3.1では avnuvyām の代わりに anuyuvám という語が用いられているが、こちらは \*anu-√yu- 「後ろからつなぎとめる＝しがみつく、依存する」 から作られた形容詞 anu-yú- の Ac. 形が副詞として用いられている（「依存／屈伏した状態で」）と考えられる。Caland (ŚBK. Intro. p.51, § 14) によればこの -vya- と -yur- の用法に関しては、Kaṭha 派は Mādhyandina 派の用法と一致し、Taittiriya 派と Mānava 派は Kāṇva 派の用法と一致するという。

5) áukṣṇaiś cármabhiḥ. áukṣṇa- (<ukṣán- 「(まだ生殖能力のない) 若い雄牛」) の意味については、Kiehnle, *Vedisch ukṣ und ukṣ/vakṣ*, 1979, p. 190; Mayrhofer, EWA., s. v. ukṣan- を参照。Kiehnle は雄牛の皮がここで用いられていることに意義深さを見てとるが、深読みのしすぎと思われる。

6) préta. Cf. Sāyaṇa 註: ‘preta’ gacchata, protsahadhvam iti yāvat 「preta = 『行くべし!』。『勇気を出して行うべし!』と解釈することも可能である」。

7) asūyāta iva. asūyāte は、Kiehnle, op. cit. p.124, fn. 3では、ásu- ‘Hauch’ (吐息) の Denominative ‘schnauben’ (鼻息を立てる) と解しているが、ásu- にそのような意味はないとする Mayrhofer, EWA, s. v. の見解に従って、ここでは ‘murren’ 「ぶつぶつ (不満を) 言う、ぼやく」の意に解した。Cf. pāli. usuyyati/úsūyati 「嫉む; 羨む」(雲井【パーリ語佛教辞典】s. v.) PW. s. v. asūyā-. この文で iva は、先行語を弱める働きをしていると考えられる。すなわち文全体で「実際には『ぶつぶつ文句を言』っ



たわけではないが、そのような態度で述べた」というニュアンスを含む。

8) Kiehnle も指摘するように、このような概念は既に RV. 第 1 巻に現れる。RV. 1. 164. 34a : *pr̥cchāmi tvā páram ántam pṛthivyāḥ* 「大地の果て（終端）を汝に問う？」；1. 165. 35a : *iyāṃ vedīḥ páro ántaḥ pṛthivyá* 「大地の果てはこのヴェーディなり」。Johansson によれば、*vedi-* の語源は \**va-sd-i* ('seat' < *ava* √*sad* 'to sit down' + *i*-) であるという。また、Gonda, *The Ritual Functions and Significance of Grasses in the Religion of the Veda*, 1985, p.230f によれば、*veda-* 「手箒」との関連性が指摘される。すなわち、Johansson の指摘が正しいとしても、早くからその語源が見失われ、*vedi-* が草で敷き詰められていることから、チガヤの束で作られる *veda-* との関係で再解釈されたのではないかと、Gonda は推測する。現存するヴェーディの形態 (Cf. 拙稿, 1997, 〈付録 1〉) は、黒羚羊の皮が座布団として広げられた形を模したものか (?)

9) *só 'yāṃ viṣṇur glānāḥ/chándhobhir abhítaḥ páriḡṛhīto 'gnīḥ purástān nāpakrámaṇam āsa sá táta eváuṣadhīnāṃ mūlāny úpa mumloca*. この文章の Syntax 理解については研究者により見解が分かっている。Delbrück, *AIŚ.*, p.394-5 は過去受動分詞 *glānāḥ* と *páriḡṛhīto* を定動詞に等しいものとみなしている。一方、Oertel, *Syntax of Cases.*, p.22 によれば、"*só 'yāṃ viṣṇur glānāḥ*" は 'proleptic subject nominative' であり、その後には 3 つの挿入句が続き、最後に 'proleptic subject nominative' を受ける *sá...* が来ているという。Oertel はその根拠を 1.2.5.9 でその 3 つの挿入句が繰り返されていることに求めるが、それが十分な根拠にはなるとは思えない。これに対し、Keith 1909 (ZDMG): p.348-9 は *agni... apakrámaṇam āsa* を挿入句と解している。拙訳においては、*sá táta* 以下が主節であり、その理由 (4 つ) を示す従属節が先行している (1. *glānāḥ*, 2. *chándhobhir abhítaḥ páriḡṛhīto*, 3. *agnipurástāt*, 4. *nāpakrámaṇam āsa*) と解した。私見によれば、この文章の Syntax 的特殊性は当時の口語的文体を反映したものと考えられる。すなわち、個々の格関係に統一性はない (N. の主語が交代している) が、文全体としては論理性を保っているというような現象は、

(120)

会話においては日常的なものである。

10) *tám khánante ivānviṣus*. この文章内ではまだ Viṣṇu は見つからないので、この *iva* は「先行語を弱める働き」をもち、先行語句があくまでも願望内容であることを示していると考えられる。それを強調するなら以下のようにも訳せよう－「彼らはあたかも彼を掘り出しつつあると考えて探した」。

11) Eggeling (p.61) の解釈によれば、「それゆえ [アドヴァリユをしてアークニードに] まさに草本の根を引き抜くように命じさせるべきなのである」。但し、この文の主語と間接目的語については、Sāyaṇa も言及していない。

12) *saṃvatsaró yajñāḥ prajāpatiḥ*. プラジャーパティと年の関係については、Gonda, *Prajāpati and the Year*, 1984, esp. 78-91 参照。

13) *vimṛṣṭāntarāmsā vimṛṣṭa-* の用法が特殊であり、理解しにくいが、Sāyaṇa 註 (*śronīto vimṛṣṭam nyūnam antaram avakāśo yayos tau 'vimṛṣṭāntau' tathāvidhāv amsau yasyāḥ sā tathoktā*) に従って「腰より狭い両肩の間隔をもつ」を意味する Bahuvrihi と解した。

14) Cf. Sāyaṇa 註: *paśuprāptihetuvāt purīṣasya paśutvam* 「家畜獲得の原因となるが故に、*pūrīṣa-* (=生ごみ?) が家畜なのである」。これに対し、Eggeling I, p.64, fn. 1 は、この表現は *pūrīṣa-* のもう一つの意味「糞便、厩肥」が家畜を象徴的に表すことに由来すると推測している。*pūrīṣa-* の語源と意味に関しては、Gonda, *Notes on Pūrīṣa-* (in *SS. VI-2*, pp.516-529) を参照。

15) Eggeling (p.64) に従って補った。

16) 祭火を設置された場所が黒く焦げてクレーターになったという意味か(?)。

17) Mahidhara ad VS. および Uvaṭa ad VS. によれば、Viṣṇu を指す。

18) *svadhā-* の意味に関しては「原義は『自決力』:『祖霊達が自由に取ることのできる食料 (祭火により運ばれる必要がない)』の意か?」(阪本(後藤)純子「*iṣṭā-pūrtā-* 「祭式と布施の効力」と来世」、『今西順吉教授還暦記

念論集：『インド思想と仏教文化』、1996、pp.(67)-(87)、n.11) という指摘がある。Oldenberg, *Die Religion des Veda*, 1923, p.531, fn. 3) ; Renou, *Études sur le vocabulaire du Rgveda*, 1958, pp.18-20.

19) Uvaṭa ad VS. 1. 28 : yāṃ candramasi brāhmaṇā dadhuḥ iti śruteḥ. というが、テキスト通り、brāhmaṇā + ādadhuḥ の意に解した。

20) āpi nādriyeta. 「おそらく注意／尊重すべきではない」 > 「省略してもよい」。Pāṇ. 1. 4. 96に従って、āpi を 'sambhāvanā' 「蓋然性」の意味に解した。āpi + optative の用法に関しては、Gonda, SS. II, pp.157-170, esp. p. 169を参照。

21) W.B.G. sphyá strṇuté haivāinena. の読みを採用した (cf. K. sphyāḥ strṇuté haivāinena). 但し、G. の分解 (varjo vai sphyāḥ, tṛṇute haivāinena) は誤り。この Visarjaniya が脱落する Sandhi は種々の Prātiśākhya に規定があり (e.g. Vājasaneyi-Prātiśākhya III, 13), 伝統的なものと推測されるが、G.K. の編者はこの Sandhi に気づいていないのであろう。

22) この文の代名詞は Sāyaṇa 註に従って訳した : yat khalu 'asyāḥ' vedeḥ khaṇanādikaṃ 'krūram' karmābhūt, tad anena sphyasyodaṇḥ nirasanena 'asyāḥ' vedeḥ 'ahārṣit' nirāsyat. 「じじつこのヴェーディに [木剣で] 掘ること等の血なまぐさい行作が行われたとき、この [手] によってこのヴェーディから木剣を北を向いて放り捨てることによって [傷口を] 'ahārṣit' = 『取り去った』から」。

23) śa hetyovāca bṛhaspātir āṅgirasāḥ を śa ha + ā + itya + uvāca bṛhaspātir āṅgirasāḥ と分解して理解した。この Sandhi (ha+ā+itya > hā+itya > hetya) に関しては、伏見誠氏が既に指摘している (『Bhṛgu の他界体験物語』『インド思想史研究9』、1997, fn. 6) ように、種々の Prātiśākhya に規定がある。Cf. Śaunakīya Caturādhyāyikā (HOS. ed.) 3. 2. 15 : ākāraḥ kevalaḥ prathamam pūrveṇa 「ā という音声は単体で用いられている場合、最初に先行する [母音] と [Sandhi する]」。ŚB. におけるこの種の Sandhi (a+ā+i > ā+i > é) の実例としては以下の箇所が挙げられる : 1. 6.

(122)

1. 9 sá hétyāgnir ... ; 3. 3. 2. 16 áthétya ... ; 4. 2. 1. 33 áthétya ... ; 4. 4. 1. 14 áthétya ... ; 4. 5. 3. 11 áthétya ... ; 11. 6. 1. 7 sá hétya ... .

他方, P. Hacker, KS., pp.449-450は, sá héty ovāca bṛhas pátir āṅgirasasḥ と分解して, ovāca を ā√vac- (PW. Jmd anreden, Jmd zurufen) の3人称, sg. Perfect, Paras. に解しているが, この分解の際に生じる íti の意味が彼の独訳に現れていないことから分かるように (“Da sprach Brhaspati āṅgirasa zu (den Menschen): ...”), この分解は, 上記の Sandhi に気づかないことから生じた誤りである。

24) pariṣūtá-. 意味がやや不明瞭である。Sāyaṇa 註「囲まれた (parigrhīta-)」も正鵠を射たものとはいえない。

25) yád vái śúsrumá devánām. pariṣūtám tád eṣá yajñó bhavati. Perfect である śúsruma は「昔, 聞いた話だが」というニュアンスの挿入語と解する。

26) sāmtyati. 「清められる」とも訳しうる。

27) átha yadá barhí str̥ṇánty ápi pádābhītiṣṭhanti. 1. 2. 5. 21と同じく, この ápi も「蓋然性, 仮定」を表す用例とみなした。

28) Cf. Oertel, *Syntax of Cases*, pp.22-23.

29) この文における íti の意味については, PW. s. v. iti 2) を参照。

30) vājedhyáyai. 形態論的／意味論的に問題が多い語である。Mahidhara は vāja- + idhyā- (=dipti-) と分解する（「vāja- を燃え上がらせるために」）が, idhyā- の用例はここ以外にみられない。一方, PW. s. v. vājedhyā- は, vājetyā- “Wettlauf” (競走) の誤りである可能性を示唆する（「競走のために」）。AiG. II-2, p.832によると, vāja-yatnāyai “zum streben nach Gewinn” (Kāṭh. 1. 10) という正規形の誤伝とする。ここでは, vāje (L.) を前分とする複合語と解して「vāja- に心を集中させる (√dhyā-) ために」と解した。√dhyā- の意味と用例については, Gonda, *The Vision of the Vedic Poets*, 1963, p.289 f. を参照。あるいはもう一つの可能性としては, Denominative vājay- の Dative Infinitive vājayadhyai という語形が vājedhyai > vājedhyāyai と誤伝されたと考えられることも可能であろうか

(?). この推測が正しければ、Kāṭh. の語形は vājayadhyai > vājayadhyāyai (この変化の原因は不明) という語形の dhyā が tnā に誤伝されたと考えられる。

vāja- の意味については、Gonda, *Aspects of Early Viṣṇuism*, p.44 ff. ; “Vāja in the R̥gveda,” in SS. VI-2, pp.569-581 ならびに Oguibénine, *Essays on Vedic and Indo-European Culture*, 1998, pp.105-119 (dakṣiṇā- との対比研究) を参照。Gonda は Renou の “prix de victoire” (EVP. IV, p.29) という理解を否定し、本義は “a restorative, recreative, revitalizing, rejuvenating power or influence which can manifest or materialize in various forms or manners” であるという。Gonda の指摘するように、具体／抽象という区別ができないこのような「力」の概念は文脈に応じて極めて多くの意味をもつから、拙訳では一つの訳語に確定しなかった。

31) itiva. Cf. PW. Er streicht so (vorwärts) mit den obern Enden (des Büschels) im Innern (des Gefasses), so (ruckwärts) mit den Wurzelenden (des Büschels) auf der Aussenseite : so (herwärts) ist der Athemzug, so (hinwärts) ist der Aushauch.

32) 固定されるべきものは縄によって固定されるの意であり、「夫人＝牽引動物」の比喩が意図されているわけではない。

33) この単語の意味に関しては見解が分かれている。Eggeling/Griffith は Mahīdhara の指摘に従い √viś- 「浸透する」の派生語として ‘pervader’ と訳し、viṣṇu- と veṣya- との etymological play を指摘する。PW. は「おそらくヘッドバンド (Kopfbinde)」と推測する (この場合、veṣa- 「衣装」 (Manusmṛti 4.18) の派生語と推測される)。筆者は、Eggeling/Griffith に従い、Viṣṇu の本来の意味 (辻: 「太陽の光照作用を神格化した」『インド文明の曙』 p.83) をふまえた Mantra と理解し、(あらゆるものを包み込む) 太陽光線のようにしっかりと縄が巻きつくことを願った、と推測する。

34) この単語の意味については、Gonda, *The Meaning of the Sanskrit Term Dhāman-*, 1967, esp. p.60 f. ならびに Keith, *The Religion and Philosophy of the Veda and Upaniṣad*, 1925, p.487 を参照。この単語の意

(124)

味に関し残された問題は多いが、暫定的措置としてここでは dhāman- の意味を「(神聖なエネルギーが充実する) 場所、(神々の) 住居」と解し、「わが (me)」（祈献主夫人の）という限定辞が存在するので、祈禱所 (= devayajana- 「祈献所」) と訳した (結果的に Eggeling 訳 “dainty (or, sacrificial site)” のカッコ内の訳語に一致した)。因みに、Gonda, *Mantra Interpretation in the ŚB*, p.200 は, “Be thou a good invoker of the gods for every manifestation of (endowment with the relative) divine power, for every formula” と訳す。

35) Sāyaṇa 註に従った。

36) rāsa-. Eggeling の訳のように、ここでは乳清 (serum) を指しているのか (?).

37) このような思考法と他のブラーフマナに現れる vicakṣaṇa- の意味については、Dange, *Vedic Sacrifice: Early Nature*, 2000, p.xlii. および Aitareya-Brāhmaṇa 1. 6. 6-12 を参照。

38) Cf. 徳永宗雄「同語反復表現におけるインド的思惟の特質」(『哲学研究』, 557号 (48-3), 1991, pp.429-467), p. 452.

39) amṛta- の意味については、Gonda, *Four Studies in the Language of the Veda*, 1959, pp. 97-98 ならびに Gonda, *Change and Continuity in Indian Religion*, 1965, p.61 f. を参照。

略号 (テキストの略号に関しては、拙稿1997を参照のこと)

AiG(N). I-III : Altindische Grammatik(Nachträge), A. Wackernagel, J. Debrunner, 1886-.

AiS. : Altindische Syntax, B. Delbrück, 1888.

Eggeling I-V : The Śatapatha Brāhmaṇa. According to the text of the Mādhyandina school, tr. by J. Eggeling, 5 vols. (SBE. 12, 26, 41, 43, 44), 1882-1900.

EVP. : Études védiques et pāṇinéennes, L. Renou, Paris, vol. I-XVI, 1955-67.

EWA. : Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen, M. Mayrhofer, 1992- (1996).

Gonda, SS. I-VI : J. Gonda Selected Studies, I-VI, 1975-1991.

Griffith : The Texts of the White Yajurveda or Vājasaneyi-Saṃhitā, tr. by R. T. H. Griffith, 1899.

KS. : Kleine Schriften

PW. : Sanskrit-Wörterbuch (=Petersburg Wörterbuch), O. Böhtlingk, & R. Roth, 7 vols.

Sw. : Kāṇvaśatapathabrāhmaṇam ed. and tr. by C. R. Swaminathan, vol. I-III, 1994, 1997, 2000.

ŚB. : Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina), pub. by Gangavishnu Shrikrishnadass, 5vols.

ŚBK. : Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva), ed. by W. Caland, 1926 (Rep. 1983).

Minard I-II : Trois énigmes sur les cent chemins. Recherches sur le śatapatha-brāhmaṇa, A. Minard, Tome I-II, 1949-56.